

## 宇佐見報告へのコメント

桜井 英治

研究会ではここしばらく古代から中世前期への移行の問題をテーマとしてきたが、今後は中世後期から近世初期への移行の問題にテーマをシフトさせ、とくに今回は制度よりも、貨幣を実際に動かしていた人やネットワークに焦点をあてて報告していただく趣旨とのことである。馬借・商人・問・関・水運など、中近世の流通問題に関して幅広く研究されている宇佐見隆之氏は、まさにこの趣旨に打って付けの報告者といえよう。ちなみに、今回の報告に直接関連する宇佐見氏の論文を参考までにあげておく以下のとおりである。

I 「津・市・宿」、佐藤信・吉田伸之編『新体系日本史 6 都市社会史』山川出版社、2001年、II部4章

「港町の成立過程をめぐって」、桜井英治編『国立歴史民俗博物館研究報告 古代・中世における流通・消費とその場』号数未定、2004年3月刊行予定

II 「問の展開」、宇佐見隆之『日本中世の流通と商業』吉川弘文館、1999年、第2部第3章

III 「代銭納と現物納」、同上書、第3部第1章

また宇佐見氏は、流通史を専門としながらも、どちらかといえば物流史に軸足を置いていたためか、これまで貨幣に関しては（信用貨幣である割符を除いて）ほとんど発言されてこなかった。その宇佐見氏が貨幣に関してどのような所見をもっているのか、またそれと氏の流通史研究とがどのようにかかわるのかを直接伺える機会としても、今回の研究会は貴重なものである。評者としても、研究会の趣旨にかんがみて、なるべく貨幣史との関係に即してコメントを加えたい（なお「港町の流通過程と貨幣をめぐって」という報告タイトルは意味がとりにくく、その含意について補足説明していただく必要がある）。

宇佐見氏はまず港町成立の契機として、井上寛司氏と同様、「水運が地域における基幹的交通手段としての地位を確立する」時期を重視するが、井上氏がそれを11世紀から12世紀に求めたのにたいし、宇佐見氏は水運に関する史料所見が増える12世紀末から13世紀に引き下げるべきだと主張する（I）。またそれまでの史料にみられなかった新たな港町が各地に出現する16世紀初頭を次なる画期、「港町の広がり」の画期として重視する点も独創的である（II）。ところがIIIにおいて、代銭納制が一般化する時期が「後に続く港町発展の時期と一致するのではないか？」と述べているのはやや唐突である。これはI・IIの結論とどのようにかかわるのであろうか。代銭納制が中世の流通構造に革命的な変質をもたらしたことはまちがいないが、それが「港町発展の時期と一致する」という論拠はどこにも示されていないように思われる。この主張が説得力をもつためには、港町発展の画期が代銭納制の一般化する13世紀後半に絞りこまれる必要がある。

次に、若狭の「浦」において、代銭納段階（三）に続き、いわゆる「かい物」制度とし

て現物納が復活する段階（四）があらわれるというのは興味深い現象だが、ここでは代銭納段階とは違って、港町の発展過程との因果関係には触れられていない。両者は無関係と理解してよいのだろうか。一方、それにかわって言及されているのが、貨幣の多様性との因果関係である。察するに宇佐見氏は、それまで銭で貢納されていた年貢に現物の魚貝が交じるようになった若狭の「浦」の貢納システムと、それまでもっぱら銭が用いられていたところに米や金銀が交じるようになった16世紀後半の貨幣動向とのあいだに——時期的にはほぼ一致することもあって——直感的なアナロジーを認めたのであろうが、両者は類似した現象ではあっても、コンテキストはまったく異なるように思える。魚貝が年貢に分類されていた若狭の「浦」は特殊なケースであり、これらは一般の所領ではむしろ公事に属すべき品目である。公事は年貢が代銭納化したのちも、引き続き現物納が多いことが知られている。若狭の「浦」の魚貝は年貢でありながら公事としての意義もあわせもっており、途中で前者から後者への揺りもどしがおこったものがいわゆる「かい物」制度の本質なのではなからうか。

続いて宇佐見氏は、16世紀後半の貨幣動向について「一つの流れが言える時代なのか？」という率直な疑問を、いくつかの史料をあげつつ開陳しているが、なるほど宇佐見氏のあげた史料をみれば、銭・米・金・銀がいかにもアランダムに併用されていて特定の傾向性など存在しないかにみえる。しかし微分的視点でみれば、それらの貨幣のなかにも衰退過程にあるものと興隆過程にあるものとが存在したはずである。浦長瀬隆氏の研究は、分析が土地売券に偏重しすぎている点がしばしば批判をうけるものの、長期的な展望としてはたやすく覆るものではなからう。もちろん批判的検討はつねに必要な。その際、当該費目が高額取引か小額取引か、地域間決済か地域内決済か、あるいは浦長瀬氏も指摘する伊勢国の東国的様相や、宗教的施設や儀式にありがちな伝統拘束性を考慮する必要はないのかなど、さまざまな視角を用意しておくことが肝要であろう。

最後に、宇佐見氏が直接には言及しなかった重要な論点を二、三提示しておきたい。

港町といえば、遠隔地流通の拠点として、戦国期のように地域が政治的に分断された時期においても地域と地域を結びつけ、均質化させる機能をはたしたというコンテキストで語られることが多い。もとよりそうした側面を認めることには吝かでないものの、こと貨幣史とのかかわりでいえば、東日本における永楽銭の高評価とか、地域ごとに異なるピタや省百法が選好されるといった地域性（黒田明伸氏の表現を借りれば、「支払共同体」の形成）がいかに生まれるのかという問題について、宇佐見氏の見解を伺いたい。また、「貨幣を実際に動かしていた人やネットワーク」への関心からいえば、たとえば永楽銭が東日本に運ばれ、滞留するメカニズム・物流構造についても、物流史や東国水運に詳しい宇佐見氏の見解を、この機会にぜひ伺っておきたいところである。